

ゲンバの風

「人々の生活向上に貢献できて、初めていいものができた」と誇りが持てる」



スリランカ南部高速建設事業
プロジェクトマネージャー
堀川祐毅さん
Horikawa Hiroki

雨期には川が増水し水浸しになるベントウータ川。高速道路が完成すると、ここに橋が架かる

スリランカ初の高速道路が、JICAの円借款支援で建設されている。そのゲンバで、1,700人もスタッフ・労働者を率いる堀川祐毅さんは、完成した道路がもたらす経済効果に期待を膨らませる。

文・写真=谷本 美加(写真家)

新しい工法を導入した 高速道路建設

雨期が半年も続く国での大規模な土木工事は、決して容易ではない。「雨量が多ければ、工事現場へ行く道も水没してしまふ」。そんなゲンバで道路建設事業を施工するのが、大成建設株式会社の堀川祐毅さんだ。

2004年よりスリランカに駐在し、上水道普及率の低い中部の都市キャンディに安全な水を供給するための上水道施設の新設に携わっていた。その事業は07年に完了し、今では水をめぐる生活環境が大きく改善している。そして同年11月から、円借款による南部高速道路建設事業のプロジェクトマネージャーを務める。「初めて空港に着いたときは、薄暗くていかにも途上国に来たなという感じでした。それからは、時間がたつのが早かった。」

大都市コロンボから南部の港町ゴールやマータラまでを結ぶ総延長126キロの南部高速道路は、完成すればスリランカで初めての高速道路。日本はうち67キロの建設を支援する。施主に当たる同国の道路開発庁にとっては、もちろん経験のない

ことばかり。円借款事業だからこそ、道路開発庁とは対等な立場でのパートナーシップを組むのだが、現実には、技術・知識・経験の差異が大きく、さまざまな局面で苦労が尽きない。最初の壁は、建設現場が地盤の弱い湿地帯であることに端を発していた。軟弱な地盤の上に構造物を構築すれば、地盤沈下が起こるため、地盤の改良が必要だ。そこで、工期の短縮や環境負荷の観点から、新しい工法を提案した。それは真空圧を利用した地盤中の水分を吸い上げて排出し、地盤を強化する強制排水圧密工法というもの。しかし、道路開発庁にとっては、新しいがゆえに半信半疑の手法だった。理解し承認してもらうため、試験施工やデータ分析に1年弱という時間を費やした。

現地のやり方や労働者への配慮

もっとも、途上国の社会基盤整備に、日本の技術を駆使することの必要性を感じつつ、時には「すべて日本流を通すことが果たして正解なのか」と考える。例えば、工事区間の住民への説明などは、地元スタッフの

声を聞き、この国のやり方を尊重することで、事業がより円滑に進行したという。

また、この事業では、日本人、スリランカ人のほか、フィリピン人、タイ人、インド人など、多様な国の人々が持つ知識や技術が投入されている上、現場の労働者を含めると1700人もの大所帯だ。それだけに、スタッフ全員の心身両面における健康管理は、プロジェクト責任者の大切な仕事の一つ。「最初は、労働者全員に安全靴を履かせるだけでも大変だった」と言うが、現場での安全管理に注意を払うのも、彼らのためを思っていること。

さらに、NGOなどと連携して、HIV／エイズ予防のための啓発活動なども取り入れている。こうした大規模インフラ事業では、多数の労働者が動員されることに加えて、人の流れが活性化し、HIVなどの感染症が拡大する可能性がある。統計上ではHIV感染率が低いスリランカだが、初期段階に対策を講じなければ、感染が深刻化する条件がそろっているともいわれているのだ。堀川さんは「途上国での貢献事業でマインスの要因があつてはいけない」と強調する。

PROFILE

堀川祐毅 ほりかわ ひろき

1963年広島県出身。広島大学大学院環境工学科卒。88年に大成建設株式会社入社。日本で宅地造成や一般廃棄物処理施設、東京ディズニーシーなどの建設事業、香港ディズニーランド・リゾート建設事業を担当した後、2004年よりスリランカに駐在。07年11月より南部高速道路建設事業に携わる。

「工事完了後、人々の生活向上に少しでも貢献できて、初めていいものができたと誇りが持てるのかもしれない」と、高速道路が秘める可能性に思いをはせながら、2010年9月の完成の日を目指す。



工事の進行具合は3割程度。2010年9月の完成に向けて工事を急ぐ



ベントウータ川橋梁工事の現場技術者はフィリピン人(左)。建設には、日本人、スリランカ人のほか、20カ国の人々が従事している



現場一帯は湿地が広がるため、水分を吸い上げて地盤を強化する新しい工法が用いられている



堀川さんの事務所でのミーティング。所内だけで120人、工事現場も含めて1,700人ほどが高速道路建設に携わっている



ネパール人労働者に対するHIV／エイズ予防のための啓発セミナー。こうしたセミナーを定期的に行っている

